

# 認知言語学 研究室

## 言葉と身体的経験の 間にある関係を 実際のインタラクション データから探る



深田智 教授  
[基盤科学系]

**【経歴】**  
2001年04月- 英知大学 講師  
2003年04月- 英知大学（聖トマス大学）助教授（准教授）  
2009年04月- 聖トマス大学 教授  
2010年09月- 京都工芸繊維大学 准教授  
2017年01月- 京都工芸繊維大学 教授

**【研究分野】**  
認知言語学、認知意味論、言語習得、認知科学、子ども学

研究室探訪

認知言語学研究室

### 【研究概要】

私たちは毎日、他者を含む環境と  
かかわり合いながら生活しています。  
知覚や運動経験を通してさまざまな情報を得、  
多様な他者とのインタラクションの中で  
言葉を用いながら、自分の考えをまとめ、  
また時に修正していきます。  
このダイナミックな過程を、  
特に子どもの言語発達に注目し、  
実験や実際のインタラクションデータの  
分析を通して解明しようとしています。

人が他者とのかかわり合いの中でコミュニケーションを円滑に行うために  
発展させてきた「ことば」。  
その意味はどのようにして形成されるのか、  
そして他者とのインタラクションの中でどう変化し、  
人のふるまいにどのように影響を与えるのか—  
言葉の意味の研究を軸に、  
子どもたちのインタラクションとその発展にも注目して研究を進めている  
深田先生に、「ことば」の奥深さを聞きました。

### 指導者と子ども、子どもどうしの インタラクションに着目

人間の言葉について科学的に研究する「言語学」には、音韻論や統語論といった言葉の諸側面に注目した分野や、英語学や日本語学といった各言語の諸相を解明する分野の他にも、歴史言語学や社会言語学などのように、言語をより広く人の営みと関係づけて考察する分野など、さまざまなジャンルが存在します。今回お話を伺った深田智先生の専門は「認知言語学」。言葉に対してどのようにアプローチする分野なのでしょう。先生はどのように答えてくれました。「簡単に言うと、言葉を心や身体的経験と関連づけて研究する学問です。表に出てくる言葉を分析対象として、そこからどのように世界が認識されているか、どのような意図や思いが反映されているのか、などを日々の生活や日常の知覚・運動経験と関連づけて考察します」

研究において、先生は特に子どもを対象としているといいます。「言語的にも身体的にも発達途中にある子どもに注目することで、言葉を人の生活や人どうしのインタラクションと積極的に関連づけて分析し、言葉が意味を持つ過程と言葉が行動に与える影響を解明していけるのではないかと思ったからです。はじめは、CHILDESと呼ばれる子どもおよび子どもとかわる養育者や兄弟の自然発話のデータベースを活用した研究や絵本研究を行っていましたが、ここ数年は、保育園児を対象に行われた身体表現活動セッションの経年データや、保育園から小学校までの子どもたちを対象にした「キッズ運動チャレンジ!」というイベントを開催し、そこでのインタラクションを言葉と動きに注目して分析しながら、信頼感の構築などについても検討しています。「キッズ運動チャレンジ!」は深田先生が2018年から開催している言葉と動きを主軸としたインタラクションの諸相とその発達に関する研究プロジェクト。「音楽に合わせてからだを動かそう!」「頭とからだで難題に挑戦!」といったプログラムが用意され、多くの子どもたちとその保護者が楽しく体を動かす様子を採用して研究に繋げています。こうしたフィールドでの調査を通して、何か分かっ

てきたことはあるのでしょうか。「身体表現活動セッションデータを用いた研究では、インストラクターの先生と子どもたちのかかわりあいの変化が彼らの言葉と動きの変化から明らかになりました。インストラクターの先生は初回のセッションで頻繁に終助詞の『ね』を使っていました。『ね』には、相手の注意をこちらに向け、相手からの同意を求める機能があります。最初は『ね』を使うことで、初対面の先生との間で何をしたらいいのかどう動けばいいのか分からずにいた子どもたちの意識を自分に引き付け、動作を促していたと考えられます。ところが半年後の第3セッションあたりからその使用がぐっと減ったんです。この時、子どもたちにはどのような変化が見られたかを調べてみると、セッションに慣れてきたのか、自分からああしたい、こうしたいと言う子が増え、先生が何か言う前から動き出す子も出てきていました。言葉の分析を通じて、先生主導のセッションから子どもたち主導のセッションへと変わっていきつつあること、そして先生がその変化を敏感に察知して対応していたことなどが明らかになりました」。他に面白かった発見として、先生は次のような話もしてくれました。「インストラクターの先生は最初、『みんな』という呼び掛けをよく使っていたのですが、ある時から個人名での呼び掛けがはっきりと増えていきました。なぜそうなったかという、子どもたちの動きを褒めるためだったんです。『○○ちゃん、何々ができたね』と承認してあげる。個人名で呼び掛けられることで、子どもたちは自分に自信を持てるようになります。先生は子どもたちの成長を支えるように自然に言葉掛けの仕方を変えていっていたんです。さらに、セッションをずっと追っていると、子どもたちの成長も見えてきました。身体的に成長してさまざまな動きができるようになり、社会性も発達して、はじめは動きだけで伝えていた自分の思いを言葉でも伝えるようになり、目標となる動きができていくかを自ら判断し、他の子どもと言葉や動きを調整していく様子も見られました。子ども主導のセッションとなったのは、先生と子どもたちとの間に信頼関係ができていったからかなと思っています。今はこの信頼関係の構築過程も研究テーマの一つとなっています」



Fig.1—— 本学への赴任が研究の転機になった、と深田先生は語る



Fig.2—— 言語学関連の書籍も多数出版



Fig.3—— 「キッズ運動チャレンジ!」の様子

### 広がる研究フィールド

現在の研究テーマに取り組むに至った経緯についても深田先生は語ってくれました。「もともと私は主体・客体、主観・客観といった観点から言葉の意味を研究していました。認知言語学の分野でもホットな話題ではあるんですが、本学への赴任という転機もあり、本当に言語研究だけでいいのかという気持ちが湧いてきました。言語事例を持ってきて『これは主観的表現で、ここには主体がどこからどのように世界を捉えているかが表れている』といったような分析をしても、結局それは言語学者自身の知識、主観の上に成り立っていることになるのではないかと。その点がずっと気になって、違うアプローチが必要だと考えていました。そして、どのような客観的なデータを取れば言葉と意味の関係が見えるのかを模索する中で本学に赴任し、実験心理学や発達科学、スポーツ科学や人工知能の研究者と出会い、共同研究を行いながら言語以外の観点にも注目してデータを分析するようになりました。京都工芸繊維大学に来なかつたらこんな研究はしていなかつたと思うので、今はすごく幸せだなと感じています」

枠にとらわれず、研究フィールドを広げている深田先生。異分野の先生との共同研究の一つ

は、基盤科学系の米田宣幸先生との言葉と動きの相互関係に関する研究。どのような言語指示がどのような動きを生むかをジャンプ動作などの運動に注目し、実践された動きの運動解析も行いながら検討しています。その他にも、情報工学・人間科学系の岡夏樹先生や西崎友規子先生との共同研究も行っています。「岡先生とは、人とエージェントのインタラクション実験やコンピュータシミュレーションを通して、赤ちゃんがどのようにして言語を獲得していくのか、また、その過程においてどのような情報がどのように関与しているのか、などを明らかにしようとしています。また西崎先生とは、VR機器と言葉を絡めた実験心理学研究を行っています。VR機器を使って見える世界を変えた時に、その見えに関する言語指示を変えることで体の動きがどう変わるかを調べています。視点が3mの高さになった時の見えを提示して一歩の歩幅などを調べているのですが、これまでの実験から言語指示によって行動が変わることが見えてきました。体が3mの高さまで大きくなると指示した場合と体が3mの高さまで上がっていくと指示した場合とでは、前者の場合にのみ一歩の歩幅が大きくなったんです。でもそれは見えを提示されすぐの時だけで、その状態で足踏みさせると、多くの場合、もとの歩幅に戻ってしまいました。見

えと言葉によって作り上げられた仮想イメージと実際の体の動きの相互関係の解明が新たな課題となっています」

### 子どもの成長を肌で感じられる それが研究の原動力

「もともと私は『人って何だろう?』というのを研究したかったので、『言語学者』になりました。言葉を使えるようになるというのは、人が持つすごい能力。言葉の習得過程に注目し、人どうしのインタラクションの詳細を記述することでその一端が明らかになると思っています」とも話してくれた深田先生。ご自身の信念に基づいて、楽しく研究と向き合っている姿が印象的でした。「言葉の意味に興味を持ち、子どもに焦点を当て、フィールドを広げてこられたからこそ、人という存在の特異性について考える機会も得られました。子どもの成長を直に感じられ、かつ学者としてそれを記述して世に出しながら、人とは何かを異分野の研究者と議論できるのがこの研究の面白さです。子育てをしている経験から子どもの持つパワーは知っていましたが、研究を通して改めてそのすごさを実感しています。子どもたちのかかわり合いを通して、私自身も成長させてもらっています」